

慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resources

Title	「薔薇」にみる鷗外の翻訳意図
Sub Title	
Author	小沢, 次郎(Ozawa, Jiro)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1991
Jtitle	三田國文 No.14 (1991. 6) ,p.19- 26
JaLC DOI	10.14991/002.19910600-0019
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19910600-0019

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「薔薇」にみる鷗外の翻訳意図

小沢 次郎

1

森鷗外の翻訳小説「薔薇」は明治四十四年七月『女子文壇』に発表され、その後翻訳小説集『諸国物語』に収録された。小品であり翻訳作品であることもあって、この小説は従来注目されたことがなかった。しかしこのような一見何でもない作品ではあるが、じつは以下に述べるような翻訳上の重要な変更が認められるのである。そしてここにこそ作家鷗外の在り方が明瞭に看取れるのではない。本稿はこうした疑問に答えるためのささやかな基礎資料の提示に留まるものである。

翻訳小説「薔薇」は小堀桂一郎氏の指摘（『森鷗外—文業解題翻訳篇』岩波書店、一九八二年刊行など）にあるようにデンマーク語からの直訳ではなく、ドイツ語訳本からの重訳である。鷗外の日記の記述に拠れば、鷗外の口述を鈴木本次郎が筆録して明治四十四年五月十四日にできあがったものと推定される。

翻訳小説「薔薇」の梗概はこうである。
町にいたるフランシスカおばさんの朝食に招待されたお嬢さんが、

その気紛れからあたり一面に自分の好きな薔薇の花で飾り立たた自動車に乗り、朝食に招待された時間に遅れまいとさせる父親である主人を散々に手こずらせてから出発する。主人はお嬢さんが昼食に帰るまでに、家事を取り仕切るボジル婆さんと、彼女をどちらが甘やかして育てたかその責任を追及し合いながらも、お嬢さんを喜ばせるために協力しつつ昼食の席を薔薇の花で飾り立てる。主人はひとりだけで最初にお嬢さんを出迎えるために、ボジル婆さんにシャパンを取りに行かせるが、そのとき叫び声が聞こえ衝突事故が起きる。お嬢さんは運転手を出し抜き召使のビクトルと二人きりで車で帰宅するが、エンジンが故障していたのか恐ろしい速さで車が庭の薔薇の花壇を突っ切りそのまま右壁に衝突してお嬢さんは絶命する。お嬢さんの棺は薔薇の花でことごとく飾られ、世間はその死を悼んだ。

以上のように翻訳小説「薔薇」は日常の生活に題材を取りながら気紛れなお嬢さんの不思議な魅力とその魅力に翻弄される父親の姿を作品中の至るところで薔薇の花のモチーチを繰り返しつつ印象的に描いた小品であり、この作品自体に文学上における特別な問題は

何もないように思われたのも当然なことであった。ところがこの鵬外の翻訳を、鵬外が翻訳に当たって依拠した原典である鵬外文庫の *Circus Mundi. Deutsch von Ida Anders. 3. Aufl. Axe Juncker Verlag. Berlin = Charlottenburg. 1910.* (以後「便宜上『原典』と略称)の本文と比較するとき、そこには今までに看過されてきた作品内容における改変が認められるのである。

2

翻訳小説「薔薇」における『原典』と鵬外訳との主要な異同の特徴は以下の通り四点に整理される。

第一の特徴は、『原典』の副題である「ある伝奇小説」(Ein Roman)が鵬外訳においては削除されていることである。このことは小説の枠組みとしてもと存在していたこの小説における伝奇性を隠すことを意味し、それは同時に作品における日常性を強調する効果を得るためと推定される。(なお『原典』と鵬外訳との異同から推定される問題については後述する。)

第二の特徴は、『原典』においては「お嬢さん」の人物造型として重要な要素となっている「幼なき」が、そしてそれが作品の中で何度も明記されているのにも拘らず、鵬外訳では周到に無視されつつけていることである。その具体例をつぎの表1に挙げることにする。(『原典』の訳文の傍線は引用者による。また鵬外訳に記される本文および頁数は岩波書店刊行の全三十八巻本『鵬外全集』第八巻によるが、表記はすべて新字体に改めている。)

表1

『原典』	鵬外訳
<p>●例1 「ご機嫌よう、私のおちびさん……それで朝食をしに家へ戻って来るかい。」 “Adieu, meine Kleine!... Dann kommst du also zum Mittagessen nach Hause?” (p. 19)</p>	<p>「さあ、行ってお出よ。お午には帰ってくるだらうね。」 (三九八頁)</p>
<p>●例2 「しかしお前(≡子供よ)……」 “Aber Kindi!” (p. 20)</p>	<p>「違くなるよ。」(三九九頁) *この鵬外訳が『原典』と著しく異なるのは、文脈を踏まえてわかりやすく意識しているためである。</p>
<p>●例3 「かわいく、幼いお嬢様！」とボジルは言った。 “Das süße kleine Fräulein!” sagte Bodil. (p. 23)</p>	<p>「まあ、なんといふ可哀いお嬢様でございます。(以下略) (四〇二頁)</p>
<p>●例4 「子供じみた女の子だ」と議員は言った。 “Albernes Mädel” sagte der Konferenzrat. (p. 23)</p>	<p>「馬鹿な奴だ」と、主人は云つた。 (四〇二頁)</p>

こうした鷗外訳における「お嬢さん」の描写に対する「幼なき」の意図的な消去は作品の随所で認められる。これは「お嬢さん」の気紛れが決して『原典』に記されるようなかたちでの「幼なき」に起因するものではなく、むしろその気紛れが「お嬢さん」の性格自体に内在するものであることを読者に印象づけようとする鷗外の意図をもの語るものである。そしてこのことは作品における「お嬢さん」の「幼なき」に当然付随するべきはずである思かき未成熟さに対する『原典』のシニシズムを無視することによって、「お嬢さん」の人間性の不思議な魅力を強調する効果を得るものと推定される。

第三の特徴は、「お嬢さん」の父親である「主人」の名称が『原典』では「議員」(Konferenzrat)と記されているが、鷗外訳ではさきの表1例4にも示されるように「主人」(または「旦那様」)に改められていることである。このように改められた結果、「お嬢さん」の父親は社会的な関係を一切喪失して単なる日常的な一家庭内における「主人」としてだけの役割に限定されることになる。そしてこれは本来「議員」として社会的に成功し宏壮な別荘に住み燕尾服を身に纏い大綬を佩びた「主人」が、自分の家庭においては「お嬢さん」の気紛れに翻弄される存在にしか過ぎないという『原典』のシニシズムを、この場合においても作品中から消し去る効果を得ていると推定される。それはつぎの表2の具体例にも窺われよう。

表2 『原典』の訳文の傍線は引用者による。

『原典』	鷗外訳
例1	「いゝや、お前が甘やかすのだ。」

「あなたに対して言ったのですぞ！ あなたは彼女を甘やかして育てていますよ。」
「はい……はい！ しかし議員閣下はそれを禁止することがおできになります。」

“Ich sagte Sie! Sie verziehen Sie...”
“Ja...! Aber der Herr Konferenzrat,” (p.23)

●例2
議員はサロンから中へ入って来た。白いネクタイと大綬の付いた燕尾服を着ていた。

彼は突然立ち止まり、ボジルからテーブルへ、そして再び向こうにいるボジルを見た。

ボジルは彼をじっと見ていた。「このことを私は言わなければならぬ！」と彼は言った。

そして彼女は言った。「ええ、議員閣下も、おめかしとしていらっしゃいます！」

間。
Der Konferenzrat kam vom Salon herein. Er war in

「さあ。それはさうでございませぬが、旦那様、あなたが廢せと仰やれば、致しません。(以下略) (四〇三頁)

主人は食堂へ出て来た。燕尾服に白襟を付けて、綬を佩びてゐる。

主人は卓の前に立ち留まつて、卓と婆あさんを見較べてゐる。

婆あさんは主人の顔をちつと見てゐる。

「どうもこんな風では」と、主人がつぶやいた。

「それでも旦那様もお召をお改め遊ばしたではございませぬか」と、婆あさんが云ふ。

暫く二人は睨み合つて黙つてゐた。(四〇四頁)

*おわりの部分における鷗外訳

Frack mit weißer Binde und dem Ordensband. Er blieb plötzlich stehen und sah von Bodil zum Tisch und wieder zu Bodil hinüber. Und Bodil startete ihn an. "Das muß ich sagen!" meinte er. und sie sagte: "Na, der Herr Konferenzrat haben sich ja auch geputzt!" Pause. (p.25)	が『原典』と著しく異なるのは、表1例2の場合と同様に、文脈を踏まえてわかりやすく意識しているためである。
--	--

ここに記した表2例1は感情的になった「主人」が家政婦のボジルに対して「お嬢さん」を甘やかして育てた責任を追究しはじめるとすかさずボジルが「主人」に痛烈な一矢を報い、互いに責任を転嫁し合い「お嬢さん」の愛情を独占するべくふたりが険悪になっていく場面である。そして例2は例1の場面の後で気紛れな「お嬢さん」の機嫌を取り結ばうと嬉々として昼食の席を齋微で飾るボジルを「主人」が甘やかせ過ぎだと再度叱るときに、燕尾服を着て大袈を佩びすっかり礼装した「議員閣下」である「主人」もまた結局は「お嬢さん」の機嫌を取るようふるまっていることをボジルが押搦する場面である。こうした場面において『原典』では「議員閣下」という社会的な地位を視野に入れた痛烈なボジルの皮肉が、鷗外訳では「旦那様」という呼称にみられるように一家庭内での次元

へとすりかえられているのである。このことは『原典』における「議員」が「主人」と訳し改められた鷗外訳の意図を端的にあらわしたものといえよう。
 第四の特徴は、『原典』で示唆されている「主人」とボジルの内縁関係が鷗外訳では単なる主人と家政婦との主従関係に改められていることである。その具体的な例をつぎの表3に挙げることにしよう。(『原典』の訳文の傍線は引用者による。)

表3

『原典』	鷗外訳
<p>●例1 ボジルは白壁の別荘におけるある種自認した管理人だった。彼女はお嬢さんが生まれるずっと以前から、その家にいた。そして議員夫人が十年前に死んだ時に、全く暗黙のうちに、すべての「うちの」管理を占めた。 Bodil war eine Art selbstbestallte Beschlieberin in der weißen Villa. Sie war dort im Hausen gewesen, lange ehe das Fräulein geboren wurde. Und als die Konferenzrätin vor zehn Jahren starb, hatte sie sich ganz</p>	<p>ボジルといふのは、この別荘に附物の婆あさんである。御本宅でお嬢さんがまだ生れない内から勤めてゐた。十年前に奥様が亡くなつてからは、この婆あさんが内ぢゆうの事を、誰が言ひ附けたともなく、引き受けしてゐるのである。 (四〇三頁)</p>

stillschweigend des ganzen
"inwendigen" Regiments be-
mächtigen. (p.24).

●例2

ボジルは鍵を受け取った。彼女は敢えて直接には逆らおうとはしなかった。しかし彼女は彼の魂胆を見抜いていた。彼がひとりでの階段に出て、燕尾服でめかしたたところを、お嬢さんが都合よく見る(と)が出来るようにする(と)を。……しかし彼女はさうさく彼を人差し指でパンチンと弾(た)らした。

「ジャンバンはアイスベールに入れて出さなければいけない、ボジルちゃん！」

Bodil nahm die Schlüssel. Sie wagte nicht direkt, Auf-
ruhr zu machen. Aber sie
hatte ihn durchschaut: er
wollte allein auf die Treppe
hinaus, damit das Fräulein
so recht sehen könnte, wie
er sich mit dem Frack her-
ausgeputzt hatte. ...Aber sie

婆あさんは鍵を受け取った。敢て反抗はしない。併し主人の魂胆を見抜いたのである。なんでも主人は婆あさんを出し抜いて、一人で階段の上へ出て、燕尾服を着たところを、娘に見せる積りらしい。
「それからな、ジャンバンは水で冷さなくてはな。」
(四〇五頁)

würde ihm schon ein Schnip-
pen schlagen.
"Er soll im Kühler ser-
viert werden. Bodilchen."
(p.26)

●例3

「さあねえ！ あなたは彼女を甘やかして育てています、ボジル！」

「ええ、わたしたちは彼女を甘やかして育てていますね……」
"Hum! Sie verziehen sie,
Bodil!"
"Ja, wir verziehen sie..."
(p.23)

●例3

「どうも甘やかして育てたもんだから困る。」
「さやうでございますね。旦那様は随分お可哀がり遊ばします。」
(四〇三頁)

まず表3例1の『原典』において括弧つきでわざわざ「うちの」と記されていることに注意したい。このことはボジルが「奥様」の担っていたすべての「うちの」役割、すなわち肉體關係を含む役割をも受け継いでいることを示唆する。もしそうでなければ意図的に「うちの」と括弧をつけて記す表現の必然性が作品中のどこにも見当たらない。しかも例1の示唆を裏づける根拠として例2における『原典』の記述がある。「お嬢さん」をひとりで出迎える「主人」の策略にボジルが気づき指で弾こうとする行為、さらには「主人」が年配のボジルに向かって「ボジルちゃん」と極めて親しげに呼びかける行為は明らかに普通の主従關係を逸脱するものであり、主従

関係を越えるある親密な関係が存在するとしか考えられない。その親密な関係とは例1の記述と考え合わせれば内縁関係と解釈するのが自然である。そして例3における『原典』では「お嬢さん」の教育という本来夫婦が共同でなす行為を、ボジルが「奥様」の亡き後その欠落をそっくりそのまま埋めるかたちで「主人」と共同でおこなっていることを、この「わたしたち」という一人称複数形の呼称で表わしているのである。この「わたしたち」という表現もまたボジルが家政婦である自分と「主人」とを同列に扱っていることを考慮すれば例2と同様に普通の主従関係を逸脱するものであり、じつはふたりが「お嬢さん」として共同して両親の役割を担いながら、同時に自分たち自身にとつては実質上の夫婦の役割を担うことをしめすものである。したがって『原典』の記述は「主人」とボジルの内縁関係であることが読者にそれとなく推測させるかたちで巧みに書かれているといえる。ところが『鵬外訳』ではこれらの内縁関係にかかわる表現がすべて周到に削除されてしまう。「主人」とボジルの内縁関係は読者に一切暗示されないように改変されてしまい、『原典』における「主人」とボジルの内縁関係を単なる主人と家政婦との主従関係に改めている。そしてこのことは世間知らずの箱入り娘である「お嬢さん」のまだ知らない「大人の世界」の存在を否定し、一見すると周囲の人たちを翻弄しているかみえる「お嬢さん」の気紛れを中心とする世界観を作品中に潜在する「大人の世界」によって相対化させる『原典』のもつシニズムを無効にし、「お嬢さん」の気紛れな性格をそのままのかたちで何ら解釈をくわえることなしに読者に提示する効果をもつものと推定される。

『原典』と『鵬外訳』との主要な異同にみられる四点の特徴から、『鵬外訳』は『原典』が本来もつシニズムを排除する傾向のあることが認められた。すなわち『原典』における副題の「伝奇小説」の明言を避け、「お嬢さん」の性行の「幼なき」を隠し、「主人」の肩書にみる社会性を希薄にし、「主人」とボジルの内縁関係を単なる主従関係に改めてしまうわけである。が、一見すると取り留めもなくみえる『鵬外訳』によるこれらの副題上の改変はいったい何を意味し、どこに収斂していこうとするのであろうか。

『原典』と『鵬外訳』との主要な異同の特徴から推定されたことを以下に整理してみよう。

この『鵬外訳』の副題小説は『原典』とは異なり副題の「伝奇小説」を削除していることから「伝奇小説」として読まれることを不明確にしているのであり、このことは作品に内在する伝奇性を隠して逆に日常性を強調していると考えられる。たしかに「お嬢さん」の気紛れな行為は尋常なものではないとしても、わがままに甘やかされて育てられた令嬢にはありがちなことであり、この作品が飽くまで日常的な出来事のひとつを題材として成立していることを示している。そしてその「お嬢さん」の気紛れは「幼なき」から起こるものとして類型化され得ず、「お嬢さん」の生来もっている不思議な天稟として描かれている。それゆえにこそ「お嬢さん」は町中の人から愛されその死が悼まれたのである。その気紛れが家庭内においては絶対的な権威をもち、「お嬢さん」の命令のままに「主人」もボジルも翻弄されつづけているようにみえる。しかしこの「お嬢

さん」の特権は飽くまでも「お嬢さん」の特権を快く認めようとする「主人」とボジルの家庭内においてだけ有効であつて、その他の場所では到底通用し得ない。つまり社会性をいささかも帯びていず、単なる「お嬢さん」のわがままにしか過ぎないともいえる。

こうした問題に対して『原典』では「伝奇小説」という日常とは異なる次元の物語としてあらかじめ制限を加え、「お嬢さん」の「幼なさ」を強調し、「主人」をその社会的役割である「議員」と明記することにより家庭と対比されるかたちで家庭の外における社会の存在をしめし、また家庭内においても「主人」と家政婦ボジルとの内縁関係にみられるような「お嬢さん」の眼の届かない「大人の世界」の存在を示唆することで「お嬢さん」を相対化していくシニズムが認められるのである。

鷗外が『原典』におけるこうしたシニズムを無視したことは、この翻訳小説が社会性の及ばない家庭内での出来事としてあるように設定し、同時に「お嬢さん」の気紛れが決して「大人の世界」によるシニズムによって相対化され得ないようにするためにあつたと推定される。そのことにより「お嬢さん」の気紛れが如何なる解釈をも介在させずにそのままのかたちで不思議な神秘性を付与され、鮮烈な「薔薇」の氾濫するイメージと相重なって作品中に生き生きと描かれる効果を得るのである。

そして一見極めて奇矯にふるまう若い女性を扱う翻訳小説を、鷗外は『女子文壇』に一連の系譜として訳出していることに注目したい。

明治四十三年一月 釣（アルテンベルク作）

明治四十四年七月 薔薇（ピート作）

明治四十五年一月 駆落（リルケ作）

これらの作品に共通するのは若い女性のもつ不思議さ、一般の社会通念ではとらえきれない不思議さを描いていることである。たとえば「釣」は無慈悲に魚を釣り上げ地面に投げて魚を死なせる小娘が主人公となっているが、その小娘の行為に対して批判する貴夫人の「宅の娘なんぞは、どんなことがあつても、あんな無慈悲なことをさせようとは思ひません」ということばを「そんな優しい霊の動きは、壊された、あらゆる夢、殺された、あらゆる望の墓の上に咲く花である。」として否定し、むしろ小娘の行為を賛美するかたちで「ブロンダな髪、残酷な小娘の顔には深い美と未来の霊とがある。」「お前は無意識に美しい権利を自覚してゐる」と記している。

また「駆落」は少年フリッツが娘を駆け落ちに連れ出そうとするが結局は恐ろしく思いとどまろうとする、しかし娘は飽くまで駆け落ちしようとする執拗な少年をおびやかす話である。少年が駆け落ちするために待ち合わせた停車場の場面で、「少年の心に、この人生をおもちゃにしようとしてゐる、色の蒼い弱々しい小娘に対する恐怖が、圧迫するやうに生じて来た。そして娘が跡へ引き返して来て、自分を見附けて、知らぬ世界へ引き摩つて行くのだらう」と少年は思い、慌てて逃げて行くところで小説が終わる。こうした「釣」と「駆落」の間に発表された「薔薇」もまた、「お嬢さん」が「無意識に美しい権利」をもち、大人たちを翻弄することによりある意味で「人生をおもちゃにしようとしてゐる」点において、つまり社会通念ではとらえきれない不思議さをもつ若い女性を描いていること、で他の二作と共通しているといえる。

しかもこれらの作品にうかがえる気紛れのもつ不思議さには人間

の内部に潜んでいる野蛮な生命力のあることを見落としてはならぬ。それだからこそ従来の社会的な規範と鋭く対立しそれを強くつき崩そうとする衝動となつてあらわれるのである。鷗外はこの時期若い女性のもつ、こうした不思議な神秘性のテーマに取り組んでいた。したがつて鷗外訳の「薔薇」においては、既に述べたシニズムにより「お嬢さん」の気紛れに内在する不思議さを相対化させる訳にはいかなかったものと推定される。

しかし鷗外訳の「薔薇」においても「お嬢さん」の気紛れがそのまま無批判に容認されることはない。『原典』にみられるシニズムの相対化を排除した後においても、依然として原因不明の交通事故という結末だけは残るのである。「お嬢さん」がその気紛れから運転手を出し抜きピクトルとふたりだけで自動車を発進させなければ交通事故は起こらなかつたはずであり、「お嬢さん」の気紛れが遠因となつて結局はみずからの身を滅ぼすに至つたともいえる。しかもその死は唐突に何の脈絡もなくあらわれる。ここに社会的な規範を超えたかたちでの偶然性の支配する鷗外の現実認識をみてとることが出来る。

本稿は基礎資料の提示に留まるものであるので、以上の検討で「薔薇」における『原典』と鷗外訳の本文との異同の特徴、およびそこにみられる鷗外の翻訳意図の推定を終えるが、今後の課題として、先に述べた若い女性のもつ神秘性のテーマが「うたかたの記」などの初期作品をはじめとして鷗外文学全体の中でどのように位置づけられるかという問題、また、社会的な規範を超えるかたちでの偶然性の支配する鷗外の現実認識は『諸国物語』における作品中の至る所でみられるが、このことがいったい何を意味するのかという

問題を考察したい。

*尚、本稿では東京大学総合図書館に資料の便宜を図つて頂きました。厚く感謝申し上げます。

(了)